

動物の不安症状と薬物治療について

鳥取大学農学部共同獣医学科 獣医臨床検査学教室

竹内 崇

はじめに

子犬を飼い始めるとパピークラスに参加し、他の犬と接触したり遊んだりすることで、精神的な発達がスムーズに行われると考えられています。いわゆる犬の社会化が十分に行われることによって、無駄吠えや攻撃性などの問題行動が起こりにくくなります。犬の発達期を生後の週齢でみると、0～2週齢は新生子期、2～3週齢は移行期、3～14週齢は社会化期、その後の性成熟までは少年期、社会的に成熟するまでを青年期というように区分されており、特に社会化期には飼い主以外の人と接触したり、他の犬とじゃれあって遊ぶことで、自分以外の対象物との関係を築く基礎ができるといわれます。さらに、生活環境の中で経験する音（掃除機、電話、ドアの開け閉め、屋外の物音など）に対しても馴化がすすむことで、過剰な警戒心や不安を抱かないようになります。動物病院を受診する際にも、スムーズに診療を終えるためには幼少期の社会化が重要です。しかしながら、成育後に飼い主がコントロールできないような攻撃性や異常な行動、極度の不安症状など精神的なトラブルが発現し、行動矯正も困難なケースでは薬物による治療が必要となります。犬に対して処方される薬物も様々な種類がありますが、その中から、不安症状を示す犬の薬物利用について概要を以下に説明します。

主な不安障害としては、分離不安症、全般性不安症、雷に対する恐怖症、常同障害、不安に起因する攻撃行動などがあります。飼い主との分離不安については、飼い主が外出する際に普段では見られないような異常行動を示すことがあります。飼い主が外出する準備をしても実際は外出しない、外出中に犬が気を紛らすためのおもちゃ、トリーツなどを工夫することで不安症状が軽減することもあります。改善が見られない場合には薬物の使用が必要となってきます。

不安症に対して臨床の現場でよく使われる薬剤としては、抗うつ剤、抗不安剤、および抗不安作用のあるサプリメントなどがあります。抗うつ剤には、三環系抗うつ剤であるクロミプラミン（商品名クロミカルム）、アミトリプチリン（商品名トリプタノール）、イミプラミン（商品名トフラニール）などがあります。三環系抗うつ剤に共通した作用としては、セロトニン再取り込み阻害、ノルアドレナリン再取り込み阻害、アセチルコリン阻害（ムスカリン受容体）、抗ヒスタミン作用があり、同時に、副作用としては、眠気、食欲低下、尿の残留や排尿障害、てんかん閾値の低下などが知られています。

三環系抗うつ剤の用量は以下の通りです。

- ・クロミプラミン 2-3 mg/kg, BID (セロトニン再取り込み抑制が最も強い)
- ・アミトリプチリン 1-6 mg/kg, BID (抗ヒスタミン作用が強く、セロトニン再取り込み抑制作用は弱い)
- ・イミプラミン 0.5-2 mg/kg, 8-12h (抗 ACh 作用が強く、セロトニン再取り込み抑制作用は中程度)

その他の抗うつ剤としてセロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)があります。用量は以下の通りです。

- ・フルオキセチン 1-2 mg/kg, SID
- ・パキシル 1-1.5 mg/kg, SID
- ・デプロメール 1-2 mg/kg, SID

いずれの薬剤も効果の発現までに4～8週間かかるため、即効性は期待できません。また、薬物治療のみで完全に症状が消失するケースは少なく、症状発現の誘因が分かる場合はそれを取り除くこと、生活環境に問題がある場合は環境を改善することで、より治療効果が期待できると言えます。

上述のように、抗うつ剤は効果の発現に時間がかかるため、それまでの間に即効性を期待して抗不安剤が使用できます。ベンゾジアゼピン系はその代表的な薬剤ですが、以下の薬剤が犬に使用されています。

- ・アルプラゾラム 0.02-0.1 mg/kg, q4h
- ・ジアゼパム 0.1-1 mg/kg, q4h
- ・ロラゼパム 0.02-0.5 mg/kg, q8-12h
- ・オキサゼパム 0.04-0.5 mg/kg, q6h
- ・クロラゼパート2カリウム 0.5-2 mg/kg, q12h

その他の薬剤として以下のものが使用できます。

- ・トラドゾン 2-7 mg/kg/day
- ・クロニジン 0.05-0.9 mg/kg/day

抗不安作用の期待できるサプリメントには以下のものがあります。

- ・ジルケーン：主成分は乳汁中の α -S1カゼインのトリプシン分解物
(α カソゼピンはGABA受容体に親和性)
- ・アンキシタン：主成分はL-テアニン
(NMDA受容体に対する作用)

以上のように、不安症状を示す犬に対して様々な薬剤が使用できますが、薬剤投与のみで完治することは困難であり、飼い主側に問題がないか、その他の生活環境に問題がないか、などをしっかり聞き取り、徐々に行動の修正を図ることが良い結果につながると考えられます。